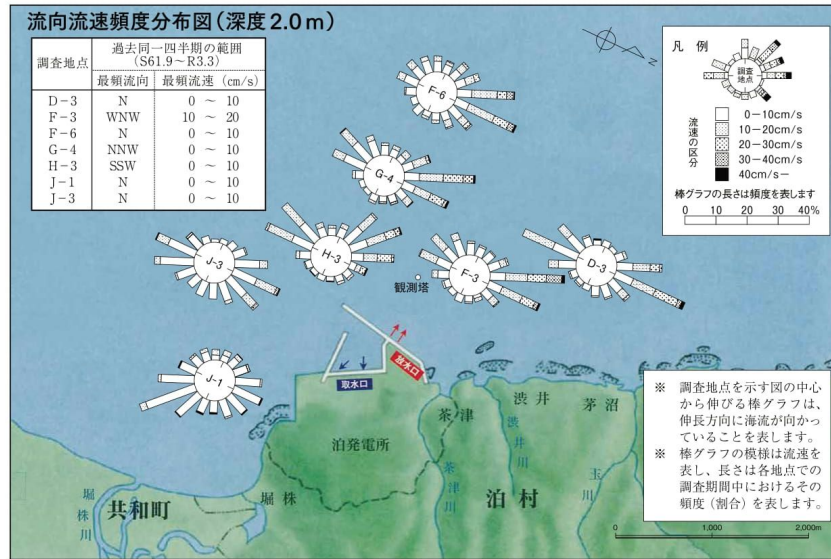


3 流向・流速調査

令和3年(2021年)11月1日～15日に調査を実施しました。
 流向は南北方向の頻度が高く、流速は0～10cm/秒の頻度が大半を占めていました。



4 水質・底質調査

令和3年(2021年)11月5、6日に発電所を中心とする沖合3kmの海域で実施した結果、水質及び底質調査のいずれの項目も**大きな変化は認められませんでした**。

項目	単位	今回の測定結果	過去の同一四半期の範囲 (S61.9～R3.3)
水質調査			
塩分	-	31.0～34.0	22.5～34.3
透明度	m	8.5～15.5	2.1～18.1
水素イオン濃度	-	8.0～8.1	7.9～8.4
溶解酸素量	mg/L	7.9～8.6	7.1～11.4
化学的酸素要求量	mg/L	<0.5～0.6	<0.5～2.9
浮遊物質	mg/L	<1.0～10.7	<1.0～14.2
全リン	mg/L	0.005～0.012	0.003～0.038
リン酸態リン	mg/L	<0.002～0.005	<0.002～0.018
全窒素	mg/L	0.07～0.32	0.03～0.63
アンモニア態窒素	mg/L	<0.005～0.015	<0.005～0.080
亜硝酸態窒素	mg/L	<0.003	<0.003～0.008
硝酸態窒素	mg/L	<0.003～0.046	<0.003～0.165
n-ヘキサン抽出物質	mg/L	<0.5	<0.5
底質調査(注)			
化学的酸素要求量	mg/g乾泥	0.4～1.2 (4.2)	<0.1～1.8 (0.5～7.3)
全硫化物	mg/g乾泥	<0.01～0.02 (0.19)	<0.01～0.08 (<0.01～0.35)
強熱減量	%	1.8～2.9 (3.9)	0.5～4.6 (2.1～5.8)
粒度組成	-	主として細砂分(同左)	主として細砂分(同左)
中央粒径	mm	0.15～0.36 (0.16)	0.11～0.38 (0.12～0.30)

<: 定量限界値未満を示す。
 (注) 底質調査では、泊発電所専用港内の調査地点の結果が、平成19年度第1四半期からその他の地点の結果と分けて評価されることとなったため、()内に示しました。

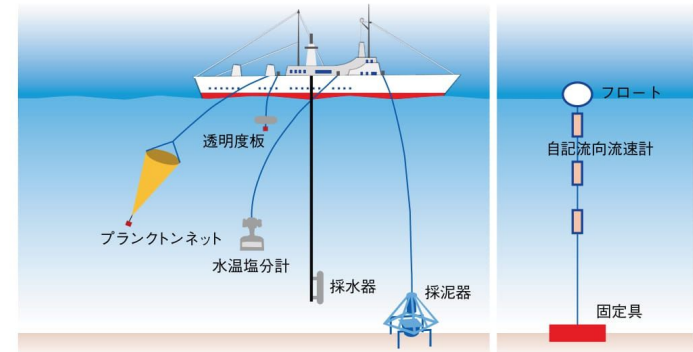
5 生物調査

令和3年(2021年)10月4日～12月8日に実施した結果、出現種類数は**過去の同一四半期の範囲内**でした。

項目	調査方法	出現種類数	過去同一四半期の出現種類数の範囲	主な出現種類名	
潮間帯生物	目視	53	34～58	イワフジツボ、ムラサキインコガイ、コウダカ、チャイロタマキビガイなど	
底生生物	マクロベントス(注)	専用港外	40	32～69	キョウスチロリ、マルソコエビ科の1種、アミ科の1種など
		専用港内	18	8～34	ギボシイソメ科の1種、サクラガイ、タケフシゴカイ科など
メガロベントス	目視	44	34～52	ムラサキインコガイ、タマキビガイ、コシダカ、ガンガラなど	
海藻	目視	35	33～52	無節サンゴモ類、イソガワラ、アミジグサなど	
魚等の遊泳動物	刺網等	31	18～38	マサバ、イシダイ、ホッケなど	
卵	MTD ネット	1	0～4	単脂球形卵 10	
稚仔	MTD ネット	2	1～5	アイナメ属、アユ	
動物プランクトン	ネット法	93	44～104	甲殻綱	
植物プランクトン	採水法	73	46～109	珪藻綱	

(注) マクロベントスは、1～4mmの底生生物(貝類、エビ、ゴカイなど)のことであり、それよりも大きいものをメガロベントスという。

◆温排水影響調査における調査の方法



調査の方法

水温モニタにおける連続測定	取水口及び放水口の温度を常時連続測定し、取水と放水(温排水)の温度差が協定に定める範囲内(7℃以下)であることを確認しています。
水温調査	定点で測定器(水温塩分計)を海底まで下ろす予定定点測定と調査測線に沿って測定器を曳航(えいこう)する航行連続測定があります。
流向・流速調査	流向・流速を15日間連続して測定しています。
水質調査	採水器を用いて深さごとに採水を行い、溶存酸素、栄養塩など12項目の分析を行っています。また、透明度板を用いて透明度の測定を行っています。
底質調査	採泥器を用いて海底の土を採取し、化学的酸素要求量、粒度組成など4項目の分析を行っています。
生物調査	プランクトンネット、採泥器、刺し網等を用いた採取や目視観察により、潮間帯生物、魚等の遊泳動物や卵・稚仔、プランクトン、底生生物などの海生生物の出現状況の調査を行っています。